宇部日報 2022年〈令和4年〉7月13日 水曜日

創刊110周年記念

誇れるふるさと 24地区リレー 〈vol.4〉

<見初② 課題とキーマン>

見初地区の地域づくりのキーワードは「みんなで『わいわいがやがや』と」。一人暮らしの高齢者が多い中で孤独や孤立の防止を意識し、互いに知恵を出し合いながら「楽しく豊かな生活ができる住みよいまち」を目指した取り組みが進められている。

子ども委員会主催の「新一年生を迎える会」でみぞめ太鼓を打つ子どもたち（見初ふれあいセンターで）

伝統行事の企画、子どもら参加

地元愛とチャレンジ精神

その中核を担うのが、2017年にコミュニティー推進協議会を発展的に解消して発足した「見初地域づくり協議会」。自治会の団体役員の高齢化や後継者不足の課題は見初も例外ではない。地域活力の低下を危惧した住民の声を受け、各地域団体を体系化してそれぞれの活動が地区の活性化につながるよう体制を整えた。次世代育成部会や健康福祉部会、文化・芸術スポーツ部会、快適健康づくり部会を組織し、単独や協働で多彩な活動を展開している。

組織を支える牧野共明事務局長、自治会連合会の梅田寛会長、子ども委員会の松本鉄己会長は、見初には「伝統を受け継ぎつつ、新たなことに挑戦する気風」があると話す。市街地にあり、周辺の炭鉱の興隆と共に成長した地域。かつて、昭和町1丁目から4丁目までの東西1200㍍は商店街が立ち並ぶ見初のメイン通りで、戦後復興の企画から始まった「十七夜祭」の盛大なにぎわいは、古くからの住民の記憶に鮮明に残っている。

1960年代には周辺の炭鉱が次々と閉山し、徐々に最盛期の活気は失われていったが、景気回復と商店街の近代化に向けた改革案が熱心に協議されたエピソードが残っており、当時の人々の見初を愛する心とチャレンジ精神がうかがえる。

そうした進取の気風は現在の地域活動にも垣間見え、公式ユーチューブ「みぞめチャンネル」での情報発信など、独自の展開もその一例。伝統の芸能文化祭、慰霊夏祭りなどの年中行事では、子どもたちを構成員として企画段階から参加させる取り組みや、IT機器を活用した新生活様式プロジェクトなど、社会的な状況を把握しながら企画を模索。空き家対策、自治会の再編成計画など、将来を見据えた長期の展望についても議論を進めている。梅田会長らは「先人が築いた地域の魅力を守り、創意工夫しながら次世代に伝えていくことが役割」と話した。